光葉ワーキングクラブメールマガジン

＜2019 年 12 月号＞　　153 号 2019.12.02 配信

第 27 回秋桜祭（11 月 9, 10 日）は、秋晴れの中「結（ゆい）」をテーマに様々なイベントが開催され、多くの学生や同窓生が集いました。光葉ワーキングでは、同窓会バザー会場の教室壁面にワーキングネットワークの歴史及び活動の紹介等の紙面を掲示し、メルマガ登録やネットワークへの勧誘も実施しました。

学園の銀杏も色づき、黄色い絨毯の上を歩く季節を迎えております。是非、学園に足をお運びください。同窓会では、皆様がいらっしゃるのをお待ちしております。

■ 学園だより

◆「羽化する渋谷」　渋谷駅 135 年の時系列模型から見る 2020 年（昭和女子大学光葉博物館）

10 月 15 日（火）～12 月 14 日（土）　10：00～17：00　（休館日 月）

◆「女子大学生と社会人で共に考える『女性の活躍できる会社』とは」

12月18日（水）15:00～16:30（開場：14:30）

企業にお勤めの社会人女性…２０名　＜要事前申込＞

※お申込締め切りは 2019年12月10日(火)です。（参加費無料）

昭和女子大学ダイバーシティ推進機構（swu-diversity@swu.ac.jp）

■ 同窓会だより

◆2019 年度文化功労者　馬場 あき子氏　おめでとうございます

（本名:岩田 暁子　1948 年 日本女子専門学校（現 昭和女子大学）国文科卒業）

「ありがたいことですが、好きなことをやって、わがままに生きてきただけなので、申し訳ないような気持ちです」。文化功労者に選ばれた喜びを控えめに語る。現代短歌を代表する歌人で、古典文学や能、民俗学にも造詣が深い。伝統を踏まえながら、現代人の心を格調高く歌い続けてきた。「短歌は言葉の芸術。言葉を研ぐ砥石のようなものを自分の中に持つことが大切」と力を込める。

（日本経済新聞 10 月 29 日）

◆光葉同窓会生涯学習　第 5 回　筆ペン教室　「筆あそび～年賀状を絵手紙で～」

日　時　12 月 5 日（木）13：30～15：00

講　師　渡邊祐子（2014 年　院生活機構卒）

会　場　昭和女子大学　10 号館 5 階光葉同窓会研修室

参加費　1300 円（筆ペン１本付）

【秋桜祭の様子】

秋桜祭バザーに全国 51 支部と卒業生 10 グループが参加、その品物の販売収益金を光葉同窓会奨学金とさせていただきます。

■広げよう光の葉

小野沢　朝子（旧姓　諸田）さん　　1985 年　大学院日本文学専攻修了

私は日本文学科と大学院日本文学専攻の６年間を昭和で過ごし、すぐに高校の国語科の教員になりました。それ以来、30 年以上教員生活を送っています。教員にはさまざまな仕事がありますが、私は担任や授業など、生徒との関わりに一番価値を置いてきました。

毎日は慌ただしく過ぎていきますが、振り返ると本当にいろいろなことがありました。雪が降った日に欠席したのをきっかけに、不登校になり、２年間で１０日ほどしか教室に入れず、別室でレポートを書き続けて卒業した生徒。（勤務校にはそういうシステムがあるのです。）登校した時はにこにこと普通に話すのに、調子が悪い時は家庭訪問に行っても、部屋のドアから決して出てきませんでした。人間の不思議や多様性を感じ、心理学を勉強してみようと思うきっかけになりました。義理の父親にＤＶを受け、その親の裁判で生徒のために証言台に立ったこともありました。

楽しい思い出もたくさんあります。私が何気なく言った言葉を真剣に受け止め、めきめきと頭角を現し、結果を出した生徒。卒業の日にそのことを長い手紙に書いてくれ、特に普段はやんちゃな男子だったのでとても感動し、今でもその手紙を大切に持っています。

授業については、勤務校は現代文も古典も両方担当するのですが、それぞれの良さがあります。評論は現代の諸問題を切り取ったものが多いですが、生徒は意外にそういう問題に興味を持っていることがわかります。ゆとり、さとりなどと言われていますが、変容し続ける現代に対して正面から対峙したり、漠然とした不安を抱えたり、批判したり、彼らなりに世の中と関わっていることがわかります。

小説は「羅生門」「山月記」「こころ」の定番教材はやはりいいですね。下人や李徴に感情移入し「山月記」の山と月は何かに豊かな発想力を見せ、「こころ」の「私」や「Ｋ」の孤独感に共感する生徒たちを見ると、現代っ子も結局根本は変わらないのだと思います。小説教材が選択制になってしまう時代がほどなくやってきます。嘆かわしいことです。

古典を身近で親しみやすいものに思ってほしいと常に願っています。源氏物語の「若紫」や「夕顔」の巻の光源氏、枕草子に登場する中宮定子やその兄弟たち、大鏡の若い道長、伊勢物語「初冠」の男など、古文の定番教材の登場人物は、皆高校生の年代なのです。それを話すと「光源氏（恋愛対象の）守備範囲広すぎでしょ」などと親しみを持ってくれます。生徒から古典が楽しいと言われるのが一番嬉しいかもしれません。

国語科が他の教科と最も違うのは、教科書が書き下ろしではなく、本物の作品を扱えるということです。その作品を教員自らが楽しみ、感動すること、これが国語科冥利というものです。また、そうでないと生徒に伝わらないのです。　高校の授業はどうしても受験至上主義になるのは否めません。けれどもその中にあって、このことを忘れないでいたいと思っています。

私生活では、数年前に子どもが社会人となり巣立っていき、ほっとしています。ずっとサッカー部だったので泥だらけの部活着を洗い続けた日々が、今となっては懐かしいです。趣味の合唱は一時子育てで中断していましたが、その後再開し、ずっと楽しんでいます。歌っている時間は私にとって至福の時です。今はメンデルスゾーンの「エリヤ」という曲を歌っています。

以上、長々と書いてきましたが、その根底となったのは、「昭和」だったのだなあと思います。昭和女子大学の今後の発展を心からお祈り致します。　　End